



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
第11号 2001年4月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX:(03)3418-4933
編集/発行/広報部

出会うの中で学んだもの



牧師 陣内厚生

伝道者となり、自分の教会(宇部緑橋)を任されて間もない頃のことです。まだその頃は、神学校での勉強の蓄えがあり、伝道的な実践経験こそ乏しいものの、なんとか牧会をこなしていたのです。

ある日、私より少し年上の青年が牧師館を訪ねて来ました。実是在日韓国人で、長期入院療養中の信徒のL兄でした。周りからお見舞いを止められていたので、会えずにいたのですが、彼の来訪は私にとってうれしいものでした。L兄一家はクリスチャンホームで、彼だけが、受洗した宇部緑橋教会に属していたのです。L兄の経歴は、一家の貧しさの中で工業高校の夜間部で学び、大学は医学部に進みました。抜群の成績でしたが、卒業間近くなったとき、彼は周囲からの蔑視と妨害のために精神の病いに陥ったのです。彼との話の中に、辛酸をなめた在日一家の生活と謂れなき差別を知り、心が痛みました。その後も入院を繰り返したL兄でしたが、まもなく自ら命を断った

のです。葬儀の中で母国語で祈った同胞らの搾り出すような祈りが、今も耳に残ってなりません。この時以来、私は在日のと小さき人びとの友となろうと心に誓ったのです。

× × ×
ほぼ同じ頃ですが、或る信徒が一人の男性を私に紹介してきました。M兄とあって、私よりも一回り先輩格、堂々たる体躯です。紹介してくれた信徒は、ひよんなことからM兄がキリスト教批判をするので、「それなら聖書を読んでからしてくれ」と言ったところ、M兄は本当に読んできたと言います。しかも、文語体の旧約聖書を、二十日間もたたないうちに――。私はもうびっくり。あとは牧師にバトンタッチというわけで、それからというもの、M兄との信仰談議の毎日が続きました。彼は戦地での体験をもつ人で、クリニングの御用聞きをしている独身者でした。私の妻が東京の話をすると、田舎の伝道には東京カゼを吹かさななくて、と直言され、求道中の彼に伝道者としての姿勢を教え

られたと思います。キリスト教は田舎といえども中流インテリ層が主流ですが、彼は自ら庶民派を自認し、常にナツバ服で通しました。

間もなくして受洗後は、聖書で覚えた豊富な聖句を駆使して、歯に衣着せぬ楽しい発言をしてくれ、実によい人材となりました。曰く、「あなたがたは隣人を愛すると言うが、この太った肉の塊のような私を愛せませうか、愛せないよね」と笑わせ、既成信徒を皮肉るのです。M兄が、年若い牧師に力説して底辺の人びとに解る福音を説いてくれと言いつけたことは、忘れられません。

信仰生活ちようど五年で自分の受洗記念日に急死したM兄は、私の伝道生活の中で、頭デッカチの牧師にならぬよう教えてくれた、印象深い大人物でした。

私の人生の師は、三十年近く前のこの二人の兄弟に代表されます。一人からは隣人への心のあり方を、もう一人からは伝道者の日の向け方を、いずれも彼らの生と死を通して教えられ、変えられたのでした。